

## 【論 文】

## 地域コミュニティの生存戦略 ——東日本大震災における被災地の対応から——

桜井 厚

### 1. 被災地のフィールドワーク

東日本大震災が起きて1年半後、わたしはゼミ生とともに被災地の陸前高田市と大槌町を訪れた。この二つの地域は、被災地のなかでも失われた人命の割合がもっとも大きい自治体である。9月、大きな建物の残骸が広大な空間のなかにわずかに残り、ただ住宅の基礎とおぼしきコンクリートの区画だけが繁茂する雑草のなかに見え隠れする光景から、ここに密集した住宅地が広がっていた市街地を想像することはほとんど困難に思われた。ゼミ生は、3年生が陸前高田市で、4年生が大槌町で、それぞれ4泊5日の日程でライフストーリー・インタビューの可能性を探ってフィールドワークを開始した。このフィールドワークは、学生の被災地へ行ってなにか支援活動をしたという要望と、わたしのゼミがライフストーリー・インタビューの実践をゼミのテーマに掲げていたことがあいまって企画された。

立教大学は陸前高田市と復興などに関する連携及び支援の協定を結び、すでに大学のボランティアセンターが2011年9月から学生を派遣するボランティア支援を始めていた。また、大学では支援を活性化するために「ボランティア支援補助」制度をつくり、大学内各機関のボランティア支援を奨励していた。その一方で、未曾有の震災経験を記録し後世へ伝えていくことも研究者の間では検討されはじめた。震災から1年余り経って、現地へ出かけた教員から被災経験を聞いてほしい、という声があがってきている、という情報を得た。

震災直後では家族や近隣の身近な人を失ったり、家屋を流されたりした人も少なくない状況では、被災経験を聞こうとする試みは被災者にとって再トラウマ化のリスクもあり、とても話す気にはなれないといった人も多いだろう。それに生活の再建に忙しく話そうにもその余裕がない人も少なくないにちがいない、と考えて被災経験のライフストーリー・インタビュー調査については控えていた。ところが被災経験を聞いてほしいという話が伝わってきて、ゼミ生と相談した結果、あくまでも通常のボランティアをおこなわないが、その過程のなかで話をしてもよい、あるいは聞いてほしい、という被災者に対してライフストーリー・インタビューをしようということになったのである。こうして希望者16名が陸前高田市と大槌町にそれぞれ8名ずつに分かれてフィールドワークに参加したのであった。

結局、わたしは大学院生の助けも借りて二つのグループを差配することになったが、陸前高田市ではボランティアの受け入れ先が見つからなかった。そこで、大学のボランティアセンターからボランティア派遣の際に受け入れをしてもらっている小友町新田部落を紹介してもらい、事務局長の佐々木秀男さんにボランティアの受け入れをお願いしたところ快く引き受けてくれた。新田部落では午前中に道路の壊れた側溝に竹竿の柵を立てる作業をしたうえで、午後からは部落会役員4人が小友町新田部落の被災状況、津波襲来時の経験について語る研修会を開催してくれた。模造紙に書かれた被災状況の図や配付資料などもあってわか

りやすく、きわめて用意周到に準備された研修にまずわたしは驚かされたのであった。初めての訪問であっても、こうした研修によって被災地の現状をリアルに知ることができたのである。この用意周到さは、すでに各地のボランティアを受け入れている経験からなされたものであったにちがいないのだが、それだけではない。後日それを確信することになったのだが、この研修会を運営している部落会役員の高さを垣間見る機会にもなったのである。

同年11月における再訪問の際、わたしは震災ボランティアの受け入れの担い手でもある小友町新田部落の役員4名にお願いして、学生とともに、当時、同行していた奥村隆と舂谷鋭、両氏の助力も得て震災経験を中心にしたライフストーリー・インタビューを実施した。このときのインタビュー・トランスクリプトは翌年、ご本人の校閲、了解を得てライフストーリー・インタビューのアーカイブに保存するとともに、適宜、研究論文に利用できるように許諾も得た。また、2013年には新たに社会学部で立ち上げられた授業「震災のフィールドワーク」の一環として、三度、新田部落を訪問してボランティア作業をおこない、併せて事務局長の佐々木秀雄さんには追加インタビューもさせていただいた<sup>1)</sup>。

4名のライフストーリーから、地震のあとの津波襲来の様子、その後の避難所生活や東日本大震災以前のこの部落での暮らしと個人のライフストーリーを聞くことができた。なかでも、津波襲来当日からの被災を免れた個人宅での避難所暮らし、そして2日後には工夫して簡易水道をひいた話を聞いて、その機転と知恵に感心したりもした。都市部などでは、とくに飲料水の確保が重要な課題となる。今回の震災時にも、首都圏ではペットボトルが震災直後から売り切れ、1週間ほどはまったく手に入らない状態が続いた経験をもつわたしたちからすれば、たとえ農村部であるにせよ、上水道が止まってもすばやく自力で飲料水を確保した事実は驚嘆に値する。そこで、本稿では、ま

ず避難所にどのようにして水を確保したのかについて、その対応と生活の知恵をみたくうえで、その基盤にある地域コミュニティの特質を、震災時の住民の避難行動と避難生活の対応から考えてみることにしよう。

## 2. 新田部落と被災状況

陸前高田市小友町は、陸前高田市の中心街から東方、広田湾と只出湾にはさまれた半島の付け根にある。新田部落は小友町内23部落の一つであり、震災前は小友町駅前に位置する64世帯からなる集落であった。JR大船渡線と平行して南西側に広田町に通じる道路が走り、その道路沿いに



図1 陸前高田市

各家が並んでいた。集落の背後には小高くなった山林が広がっており、津波襲来時には、住民はこの裏山に避難したのである。この丘陵地から左右に走るJR線をながめると、JR線を越えた向こうには一段低くなって農地とおぼしき低地が左右に広がり、その先は再び小高くなって集落がある。今は、仮設住宅の一群も目に入る。津波は東側の只出湾から第一波が、西側の広田湾からは第二波が押し寄せた。建物の全壊は47戸、大規模半壊1戸、半壊2戸で、被災を免れた家は10数戸に止まり、いずれも裏山へ登るゆるやかな傾斜地に建っている家であった。地域住民は9戸の家に分宿して避難し、避難者数は144名におよんだ。



写真1 箱根山から新田部落を望む

新田部落の簡単な歴史をひもとくと、新田部落は1933年の大船渡線小友町駅開業までは10軒ほどの家からなる小さな集落であった。しかし、駅開業とともに急速に発展し、震災前は駅を中心にスーパーなどの店舗が並び、広田湾漁業協同組合小友支所、小友郵便局、新田公民館などもそろっていた。小友町そのものは歴史も古く、気仙大工発祥の地とまでいわれており、その足跡は江戸時代まで遡る。農業だけで暮らしをたてることは難しく、そのために建築関係の仕事に就き、それが神社仏閣を造ったり建具や彫刻までおこなう技能



写真2 小友駅(左)と高台移転造成地(右上)

集団として形成されたものである。もともと住民は農業のほかに漁業、冬には出稼ぎなどで生計をたてていた。また70年代までは交通の便がよいことから新たな転入者もあったが、昨今は若い人の転出が増えて、しだいに過疎化と高齢化が進ん

でいた。

### 3. 避難生活の水の確保

震災後、インフラが破壊された。電気が一部復旧したのが3月30日で、集落全体が復旧したのが4月30日であった。上水道に至っては、復旧したのが5月31日であった。日々の生活に水は不可欠である。避難所となった9軒の家ではどのような対処をしたのだろうか。千葉政彦さんに「水に困ったことはなかったですか」と聞いてみると、「ないです、ええ」と、あっけない返答が返ってきた。政彦さんは、新田部落で10代続く旧家である。古くは鋤や鎌、鋏をつくる鍛冶屋を営んでいたようだが、父の代には駅前で雑貨を売る「かじや」商店を構えていた。震災の数年前に商店は閉店、息子が新たにガソリンスタンドを経営していたものの、この震災でその経営も断念せざるを得なくなった。政彦さんは、震災当日から妹婿の佐々木秀雄さん宅に避難した。被災した自宅は基礎がしっかりしていたために家そのものは流されることはなく、5月の連休明けには夫婦二人は自宅に戻って片付けながら暮らしはじめた。その政彦さんによると、水は「沢の水」を使ったという。

\*1: えーっと、どのへんにあるんですか。その沢の水ってのは。

政彦: わたしところはね、佐々木さんの家の近くにあったん、うん、もう水道がだめですから、うーん、そしてそっからこの、水をタンクで持ってきて、タンクでポリ缶に持ってきて使ったんですけども、やっぱり、結構湧き水があったんですね。こっちの山手の方に。うん、あの、いつも使っていないんですけども、だからまず、飲めるか飲めないかどうか知らないけども、まず病気もしなかったからね、大丈夫だった。(・・・)そして、沢水で洗濯したり、うん、



写真3 簡易水道水源の貯水槽

飲み水を確保したんですが、そのうちに自衛隊で全部来ました。一日、二回三回と。

自衛隊の給水車による給水活動は5月8日までおこなわれ、その後は全国各地から派遣された水道事業所給水車による巡回給水に引き継がれた。ところで、政彦さんが言う「沢の水」とは、どこにあるのだろうか。それは佐々木さん案内してもらってわかった。佐々木さん宅の奥の山林のなかに入って100mほど登るとかつての簡易水道の水源貯水タンクがあった。縦5m、横3m、深さ3mほどのコンクリート製の蓋付き水槽があり、上方のパイプから水が流れ出している。これが20年あまり前まで上水道が完備するまで集落内で使われていた簡易水道の水源であった。沢の水や湧き水をこの貯水槽に貯めて各戸にひいていたのであ



写真4 震災後の井戸

る。この貯水槽は、組合立で2カ所にあつて、それぞれ10世帯と20世帯ぐらいが利用していた。わたしたちが見たのはそのひとつである。

さて、簡易水道と上水道はどのような違いがあるのだろうか。上水道は、一般的に自治体の管理の下で5000人を越える給水人口をもつ規模のものであるのに対し、簡易水道は湧き水や地下水を水源とする地域コミュニティが自給している5000人以下の給水人口の小規模な水道のことである。新田部落では、上水道が敷設されてからそれまで利用されていた組合立の簡易水道が使用されなくなったのかといえば、そうではない。とりわけ農家では外で水を使うために簡易水道を今に至るまでそのまま利用している家もあった。建屋の瓦礫が片付けられてコンクリートの基礎が四角くむき出しになっている間に、所々、円筒形の井戸の跡が見られる。汲み上げる井戸水を使っていたのである。したがって、新田部落では上水道のほかにも簡易水道や井戸の水が併用されていた。

さて、各避難所へ分宿した住民には、飲み水が欠かせない。最初の2日間ほどは、水源の貯水槽から汲んでタンクで運んだ。そしてすぐに水道業者に連絡し、3日目には簡易水道の水源からパイプをひき、ポンプをつけて避難所の複数の家に通水したのである。その話を聞いた当初は、上水道の水道管にそれぞれつないだのかと思ったが、それだと工事に時間も経費もかかり、さらに上水道が通水できたときにも同じように工事が必要で、緊急にしては難しそうに思われた。当時の具体的な工事のやり方を耳にしたとき、即座に理解できず、なんだか聞き直して納得でき、そのアイデアに驚嘆したのであった。そのやり方とは、上水道の元栓を閉めた上で配水用モーターから、どこかの家にも備わっている庭の水やりなどの屋外の蛇口にホースをつないで逆流させ、家内のどこの蛇口からでも上水道と同じように水ができるようにするものだった。誰のアイデアかは定かではなかったが、なるほどと思わず頷いてしまう簡便なやり方だった。そうした方法も簡易水道を身近

に利用していることから生まれたアイデア、すなわち生活の知恵とでもいえるものの一環だったろう。

#### 4. 伝統的水利用と水道の近代化

古い話になるが、わたしはかつて琵琶湖の環境問題の調査で「川と水道」と題する論文を執筆したことがある。1980年代の琵琶湖西岸のある集落の水利用の変化を、むらの中を流れている小さな川の伝統的な水利用が簡易水道に取って代われ、さらに上水道へと変化する状況を、特定の人物のライフヒストリーをとおして記述したものである。琵琶湖に流れ込む小さな川では、伝統的に飲み水、農作物や洗濯、食器洗い、風呂水などに利用されてきた。1955年過ぎから都市部では伝染病を防ぐ公衆衛生上の観点から、農村部では農薬などの汚染の危機が叫ばれるようになって、むらでは簡易水道の敷設をめぐるさまざまな出来事があり、むらの総会が開かれたりして、次第に反対者を説得して簡易水道が敷設された。この簡易水道は、むら人が自主的に管理運営する共同の資源であって、水そのものは無料である。それに対して、簡易水道敷設から20年ほどのち、近隣の町村と一体になって上水道が敷設されることになって、今度は、水が金銭で購入する商品になった。わたしは前者の水を「共有財」、後者の水を「消費財」と呼んで区別した（桜井1984）。「共有財」という用語はあまりポピュラーではないが、簡易水道の水は、環境社会学でいうコミュニティの「共同利用資源」、すなわち「コモンズ」のことだといってよい。その意味では、河川の表流水の利用や井戸水の利用も、簡易水道と同じ類である。それに対し、簡易水道も上水道も同じ水道という点では違いが見えにくい、この二つの水にはコモンズと商品という決定的な違いのほかにもいくつかの違いがある。上水道には衛生的、安定供給などの長所があるといわれるが、それには塩素の注入による発ガン性物質トリハロメタンの生

成の危険、水道管の鉛害の怖れなどのリスクがともなうことがわかっている。多くの水道事業体は、公的機関が管理運営している公営企業でありながら、独立採算制をとっているために、経営環境は危機的であるともいわれている（鳥越2012）。

では、井戸水や簡易水道の利点といえば、そうした水を利用している人からは「無料」「おいしい」などの声がよくあがる。上記のわたしの調査においても、そうした言葉が聞かれたが、さらに伝統的な水利用においては、川にキュウリやナスの初物を備えたり、洗い物を上流から順に野菜、食器、洗濯などと洗い場をわけて洗ったりするだけでなく、川の清水の清浄さが「三尺流れれば、水清し」といった用語法で語られもした。また、簡易水道を敷設する際には、個人の井戸水を利用して敷設の負担に難色を示していた住民を説得するのに使われた言葉は「同じ部落のものなら、同じ水を飲む」であった（桜井1989）。これらの用語法は、地域コミュニティで流通し地元の人びとが自明なものとして受け入れている語りの様子の一種であった。そうした用語法の存在自体は、逆に地域コミュニティがひとつのまとまりをもった共同性、連帯性をもつ集団として存立していたことを物語っている。この論文のもとになった水道化の過程はわが国の経済の高度成長期のころであるから、今から約40、50年前の頃である。

それでは、地域コミュニティは、その後、どのように変化したのであろうか。すくなくとも、新田部落が津波の被災において示した危機対応から判断すると、水に関する限り、なんの混乱もなかったというのが一致した住民の意見である。そこから判断すると、地域住民の生活世界が見違えるほど大きく変化をしたようには思われぬ。上水道システムの機能不全に対して、伝統的な水源を有効に活用するという地域の生活の知恵によって難なく危機を乗り越えることができている。そうした対応は、単に個人のその場の思いつきやアイデアからなされたものではなく、新田部落住民のそれぞれの生活世界にとって伝統的な経験知と

して息づいており、新田部落というコミュニティにとっては成員の納得と説得をもたらす知のストックとして維持されていたことによる。しかし、この伝統的な経験知は水に限ってのことかもしれない。新田部落が地域コミュニティとして震災の危機にどのように対応したか、を震災直後数ヶ月間の動きから、さらに詳しくみることにしよう。

## 5. 地域社会の崩壊と再生の展望？

いささか古い議論なのかもしれないが、公害に象徴される資源や環境をめぐる現代社会の症候群に対して1970年代、80年代に登場した考え方には、「広義の経済学」「地域主義」などの主張があった<sup>2)</sup>。それらは自然環境と人間の共生を重視する観点であり、生命系の原理を中心として新たな〈地域〉の重要性が強調された。そのときの〈地域〉概念は規範的、目的意識的に目指されるものとして構想されており、その暗黙の前提になっているのは、既存の「工業文明を基礎にした地域は、事実上行政的範囲をもとにしており、中央集権的な官僚組織に市民生活のすみずみまで管理されている」(桜井1989:64)というものだった。わたしは、当時、そうした見方を「人びとの生活や文化を無視した議論」として批判し、「現実を生きなければならない〈生活〉者は、日本の産業化(近代化)という歴史過程においても日々対応をせまられながら、相対的に『自律性と独自性』をもって生きてきたはず」である。「日常の生活実践のなかにしかありうべき地域を展望できない」(桜井1989:68)から現実の地域を人びとの生活世界からみるべきことを主張した。この考え方は、今でも変わらない。実際、新田部落の水の緊急的な対応だけからも、こうした地域の「自律性と独自性」を垣間見ることができそうである。

東日本大震災に関連して地域コミュニティの対応の仕方を検討した吉原直樹は、これだけの犠牲者が出た原因の一端は、地域コミュニティが十分に機能しなかったことにあると指摘する。地域コ

ミュニティは「あるけど、なかった」というのである(吉原2013:53)。もちろん、例外もあって、犠牲者の割合が多い南三陸町のなかでも館浜地区は犠牲者ゼロであったことやいわき市の薄磯地区のある班の事例などをあげてはいる。防災の現場では、復興の過程をふくめて地域コミュニティがはたす役割が重要なことは衆目の一致するところである。吉原も、その意味からも地域コミュニティの展望を「『なかった／ない』ものをあたかも『ある』かのように論をたてるのではなくて、『ない』ところから出発することが基本」(吉原2013:62)であるという。2005年から東北6都市で町内会調査をおこない、震災後には福島県内で避難行動や避難所調査をおこなった実証的な分析に基づく指摘であるから、現状分析については説得的な立論であるかのようにみえる。そのうえで、「ない」ところから目指すのは、ガバナメント型コミュニティに回収されない「コミュニティ・ガバナンス」による新たな集合性の形成であり、「生活の共同」の基層にある「生活の自主性」「生活の自律性」の回復、防災のローカル・ノレッジの掘り起こしである(吉原2013:64)とされるのである。

こうした展望にまで至ると、25年前にわたしが批判した「地域主義」の考え方とあまり変わりがなく驚く。そのことは、逆に現状分析についてもいくらかの疑念を抱かせる。たとえば、情報の伝わり方や避難誘導といった緊急の対応が町内会主導ではなかったところが多かったということだけで、地域コミュニティが機能していなかった、と結論づけるのはいささか短絡的過ぎるのではないだろうか。吉原も指摘しているが、避難誘導における地域組織の構成員(消防団員など)の自ら身を挺した活躍の例は枚挙にいとまがない。避難所生活にどのように地区役員たちが関わり、支援活動をしたかの事例はあまり言及されていない。地域の現実の動きをもうすこし丁寧にみれば、「ある」ところには「ある」ということもみえてくるのではないか。新田部落は、そうし

た好事例のひとつである。

## 6. 震災直後の部落の対応

2013年9月、「生活支援・ライフストーリー・プロジェクト」の一環として小友町新田部落を訪ねた。わたしにとっては3度目の訪問である。その際、事務局長の佐々木秀雄さんから『東日本大震災時の活動記録（新田地区災害対策本部）』（平成25年8月10日発行、編集発行：新田部落会）をいただいた。内容は①「東日本大震災における新田部落会避難状況等経過報告書」②「小友町新田地域図：津波襲来時（H23.3.11）居住者」そして③「東日本大震災における新田部落会被災状況等記録写真」からなる冊子で、①は約1年間の地区の出来事が記録されたものである。研修会資料の準備のよさについても驚かされたが、被災から立ち上がるために公私ともに多忙ななかにあって、しっかりとこうした記録を作って保存していこうとする部落役員の姿勢にあらためて感心させられたのである。ここにも、この部落会の能力の一端を知ることができる。

さて、上記の『東日本大震災時の活動記録』（以下、『活動記録』と略記）を参照しながら、震災直後の数ヶ月の部落会の動きを時系列で跡づけてみよう。

### 2011年3月11日

- ・午後2時46分：東日本大震災発生
- ・午後3時23分：津波到達時刻
- ・津波の高さ：16.8m（小友郵便局付近交差点）
- ・午後4時30分：新田地区災害対策本部を及川常明宅に設置
- ・被災住民は個人宅9戸に分宿避難

### 2011年3月13日

- ・避難宅9戸に班長をおく。班長会議
- ・医療衛生部設置
- ・事業部による共同作業日程
- ・救援物資部による受領、配布作業

### 2011年3月18日

- ・1日2食分（昼・夜）の米と若干の副食配給

### 2011年3月21日

- ・自衛隊による入浴サービス開始（米崎小学校、送迎バス運行、週1回程度）

### 2011年3月28日

- ・可燃ゴミ・資源ゴミの回収開始

### 2011年4月1日

- ・一部で電気復旧、新田地区人口118名

### 2011年4月4日

- ・救援物資を一括自衛隊が搬送

### 2011年4月21日

- ・共同作業に代わり、個人宅の片付けにボランティア

### 2011年5月9日

- ・給水活動が前日に終了、全国各地より派遣された水道事業所給水車による巡回給水開始

### 2011年5月29日

- ・新田部落会役員会、役員改選

### 2011年5月31日

- ・水道復旧

冒頭で述べたように、ボランティア支援でなんとかお訪ねした際に常に世話役を引き受けてくれたのは、部落会長の渡邊鉦悦さん、事務局長の佐々木秀雄さん、そして顧問の千葉政彦さんと相談役の千葉一栄さんである。そのうち、佐々木さん以外は自宅が被災している。政彦さんの家は、家の枠組みが残り最初に訪ねたときにはすでに改築されていた。また、渡邊さんは、機転を利かせて窓を開けっ放しにして避難したためやはり家の枠組みは残った。駅前にあった一栄さんの自宅は流されてしまい仮設住宅に入居していた。こうした困難を抱えていたにもかかわらず、新田部落は震災後、5月29日の役員改選以降、主にこの4人の部落会役員によって担われてきたのである。まず、震災当時までの部落会役員組織はどうなっていたのだろうか。

まず、部落会は、会長（1名）、副会長（1名）、

事務局長（1名）、会計（1名）、幹事（1名）、体育部長・衛生部長・消防防犯部長・女性部長（各1名）からなる。ほかに地区内は5班に分かれており、それぞれの班に持ち回りの班長がいる。全世帯が64世帯であったから1班に平均12、3世帯が所属していたことになる。役員の任期は2年で、総会が毎年開かれていた。ところが、津波の被害を受けて事態は大きく変わる。部落役員が中心になり、津波が到達した3月11日午後3時23分から1時間半後の午後4時30分に、被災を免れた及川常明宅に「新田地区災害対策本部」が設置されている。1週間余で次のような組織体制が組まれた。相談役（千葉一栄+1名）、本部長（部落会長）、部長代理（千葉政彦+1名）、副本部長（2名）、女性部（部長1名）、事業部（部長+1名）、医療衛生部（部長+2名）、救援物資部（部長+1名）、本部連絡部（部長：佐々木秀雄+3名）である。3月13日には、分宿した9軒の避難先にそれぞれ班長がおかれた。その一つの班の班長が渡邊鉦悦さんであった。13日から毎日、午前8時と午後4時に班長会議が対策本部で開かれた。また13日には医療衛生部を設置し、県立大船渡病院に外来患者の搬送と薬のもらい受けを始めている。さらに同日、事業部が設置され班長会議で当日の共同作業のお知らせをして共同作業を住民が始めている。この頃には救援物資を設置して物資の受領、要望、各班への配布作業も始まった。3月16日には、発電機の支援があつてパソコンで配付資料が作られ、各班へ情報提供がなされている。18日には、1日2食分（昼食・夕食）の米と若干の副食配給が始まる。20日には、親戚宅などの地区外避難者で、新田地区人口は震災時のときの177名が126名になっていることがわかる。22日には、新田地区災害対策本部が集落の東南端にある「マルナカ倉庫」に移転されている。

以上の10日間ほどの動きをみて、新田地区がきわめて組織だった動きをしていることが手に取るようにわかるであろう。こうしたコミュニティ

次元の動きがたいへんスムーズにおこなわれた背景には、部落会の組織だった行動力とともに、集落の住民が日頃から相互によく知合っており、コミュニケーションがとれていたことが理由にあげられるであろう。それは津波襲来時にとった各自の行動についての語りからもうかがえる。

## 7. それぞれの避難

千葉政彦さんは、地震が起きたとき自分の家にいた。そして最初にとった行動が町内の巡回だった。

政彦：当時、市から委嘱されている行政連絡会員という職務をやっていたもんだから、だから、一応、なにか暴風雨とか災害があるとね、市に報告しなければならない義務があるもんだから、うん。そしてデジカメぶらさげて、そして防寒着着て、長靴はいて、帽子かぶってでかけた。そのときは3時過ぎてました。うん、それで、町内会をずっとまわって歩ったのね。

陸前高田市の有線放送が「3時半近くまでは」まだ聞こえていた。1896（明治29）年に起きた明治三陸地震、1933（昭和8）年の昭和三陸地震、そして1960（昭和35）年のチリ地震の津波のときも、JR大船渡線を越えて新田部落までは来なかったのが、政彦さんは「まさかここまでは来るとは思ってない」から町内では「地震で逃げた人はだれもいないです」という。実際、彼は津波が目前にせまってくる写真を自分のデジカメで撮っている。この土地で代々続く旧家の政彦さんは、過去の経験から悠々と構えていたところがある。

駅前之家を構えていた千葉一栄さんは、これまでの明治と昭和の三陸沖地震の記録や伝えられた話から、津波が来ることは確信していたが、政彦さんと同じく、地震が起きたときは、この地区まで到達するとは思っていなかった。そこで、駅の



ホームにまで出てみた。駅の前方は一段低くなって水田が広がっており、線路づたいに左右に目をやれば広田湾、只出湾の両方向が見渡せる。すでに駅前には20人くらいの人が集まって、一栄さんの表現では「静かに見守っていた」。おそらく、津波が来る不安を抱えて固唾を呑んで見守っていたのであろう。「津波だあ」という叫ぶ声でみると、東側の只出湾から来た津波が「サァサァサァ」とやってきた。「それで驚いたんです」「これはとんでもない津波だなあ、こう思ったんですよね」。一栄さんが驚いたのはほかでもない。地形的に低い西側の広田湾、陸前高田市の市街地の方から津波がやってくると思っていたからである。只出湾方面から小友町までは、一段高くなった峠があり、さらに小高い線路があって、津波がそこを越えてきたとなると、遅れてやってくる第二波の広田湾からの津波は、相当大きいということが予想されたのである。

最初の津波がやってくる直前に、防災無線から「大津波警報」が出された。「これはただごとじゃない、と最初に思ったのはそのときでした」と一栄さんは語る。20年近く前まで陸前高田市役所に勤務していた一栄さんは、「大津波警報」が最高ランクの警報であることを覚えていた。しかも、この地域でこれまでその警報が出されたことは、一栄さんの記憶にはなかったからである。

一栄：これは、たいへんだってね、気がしました。そして……津波をみたということで、もうそのときはもう、完全に、ここも、これはただでは済まないぞ、という気がしまして、逃げろ、逃げろってったのは、それからです。

それでも、まだここまで来ないと思っている人はたくさんいたのである。「もうすぐ逃げろって、高台にさ、全部、もう逃げれる人は全部逃げろ」と声をあげたことで、周辺の人たちはみな裏山へ避難したのである。「とにかくみんなが、こう逃

げたのは、高台に登ったのは確認したんでしょうな、わたしね。それがあいまいなんだけども、とにかく誰もいなくなったということはわかって」と語るように、一栄さんは駅前周辺にいた人が避難したのを確認している。無意識にとった行動にせよ、部落の役員としての責任感がそうさせたのかもしれない。それからやっと妻が逃げたのが気になりあたりを見回したら、妻は家の前にある旅館の自分では歩けない病気のおかみさんを「玄関に引きずり出して」いるところだった。だが、二人で「2メートルぐらいひきずったかな、舗装道路を」というように、高齢の夫婦の力ではとても運べなかった。裏山の高台までは30~50メートルぐらいの至近距離だから多くの人は徒歩で避難したが、一栄さんは「機転が利いた」と語るように車を出して、とにかく詰め込むように乗せたのであった。すでに駅前周辺にはだれもいなくなり、「あのときの緊迫感」はただならぬものであった、という。

こうして千葉政彦さんも千葉一栄さんも、長年、この集落で暮らしてきた経験から、津波の第1波が来るまでは、まさかここまで来ないだろうという予想のものに悠々と構えていた。ところが、のちに部落会長になる渡邊鉦悦さんの避難はちがう。渡邊さんは秋田県の生まれで、勤めていた建設会社の転勤で、1960年12月にチリ地震津波があった直後に大船渡営業所に配属になり陸前高田市にやってきた。したがって、この部落にとっては「よその」である。渡邊さんの自宅は細長い集落の南東の端、小友駅からはもっとも遠いところである。1978年の宮城県沖地震を仙台にいたときに経験したが、そのときは津波は来ていない。しかし、宮城県沖地震は30年周期でやってくるはず、「90パーセント確実に起きるといふ新聞情報がしょっちゅう出てたから……わたしは確実に来る、来ないのが不思議だ」ぐらいに考えていた、と渡邊さんはいふ。1ヶ月ほど前にも大きな地震があったこともあり、避難の準備をしていた。その用意周到さは聞き手も驚くほどのものである。

渡邊：それで素早く物を、貴重品を運べるようにね。タンスの脇さ立てかけてもう。茶の間に置くと蹴飛ばされるから（笑）。それですぐバックに入れて逃げる体制して。まずもうある程度突っ込んで逃げたな。そして、あと自分の車には津波は、津波っていうことよりも避難して不自由しないようにしようと。夫婦二人だけで。

\* 1：ふんふん。はい。

渡邊：だから、車の中に一時しのぎの物は全部積んでおくの。もう、それはもう何年も前から。

\* 1：あー、そうですか。

渡邊：まず、靴、防寒着、軍手、かっぱ、傘、そして、避難した時一番大事なのは歯。だから、歯ブラシ、歯磨き、コップ。だって歯、虫歯になったら食べれないからな。一ヶ月避難するか半年避難するかわからないさ。

\* 1：あの、避難されたことあったんですか？それまでに。

渡邊：なし。でも、自分でシミュレーションして、もう途方もない長期間避難する、まあ幸い車が無事であれば車に積んでおけばいいという。だから、あの食べて後始末する歯磨きの道具一式、家族の分積んで。それからあとは、タオルから洗面道具、それから足。足も悪くしたらもう動けなくなったら、何ともなんないから、足をケアするクリームとか、靴下とか。あとは、至るところで対応できるように、ズック、長靴、それからあれだ、頑丈な布靴。安全靴。あとヘルメットも。それから懐中電灯とあと電池。それからあと、あれだ、紙の皿。それからコップ、紙のコップな。あと箸にフォークにナイフにハサミに。これと思うものみんな車に突っ込んでいて、かなりの重量になったな（笑）。

渡邊さんは、このほかにも食物や水を予め車に積んでいた。地震のときは「ものが落ちてくる前に飛び出して」おさまったあとで、今度は家のなかに飛び込んでいった。何をしたのかというと、各部屋の窓や入口をすべてあけた。「玄関に行って玄関もあけて。それから田舎だからプロパンガスだから、プロパンの元栓閉めて。で、電源のブレーカー全部おろして。そして、貴重品を今度はバッグに入れて、その貴重品入れるバッグは前もってもう用意してる。パニックになると、鞆のチャックも鞆のボタンをあげられないのさ、パニックになると。だから、自分の頭の中でシミュレーションして、貴重品が直ぐ入れられるようにバッグを開いて立てかけておいてるんですよ。ずっと、パニックになっても開く必要はないわけだ。あとは突っ込むだけだから（笑）。あと蓋は閉めようが閉めまいが、持って逃げればいい。そうやってまず目に付く貴重品突っ込んで、素早く高台に」避難したのである。建物の窓やドアをあけたのは、波が通り抜けても家の基礎的な構造が破壊されたり、家ごと津波にさらわれたりしないための工夫であった。おそらく、建設業に携わってきた経験から得た知恵であったろうが、「自然に身体がうごいたんだな」と述べるように、もはや彼にとっていろいろシミュレーションをして身についた知恵でもあったようだ。その準備の良さと素早い行動のゆえに、「一番先に高台にあがって、行ったらわたし一人 [妻と一緒に] で、カッコ悪かったのさ」と笑うように、まだだれも避難していなかったのである。そのあと、妻を高台において一人で降りてきた。今ふりかえると「なぜ降りてきたのかな」と思うが、「パニックのときは考えるなんてことないな」とも思う。

渡邊: 自然に何かが動いてんだな。で、降りてきて、とにかく向こう三軒両隣だけは助けなきゃならんだろうというつもりだったんだろう。で、すぐ真向いの家に行って、真向いの家で80代のおばあさんと、犬と、

あと、娘さんリウマチの娘さん50代かな、いたのさ。そして、その娘さんにあの、介護の人が来て、お風呂に入れて。

\*1: あ、そのお風呂入ってる時だったんですか。

渡邊: うん。お風呂に入れて。津波が来たとき、お風呂からあがって、自分の部屋でベッドでバスタオル巻いてこうやってベッドに座っていたのさ。(・)それで、怒鳴ってな。逃げろ、津波来る、逃げろって。それで、すぐ行かなきゃいけないから、その介護の人には話して、それでおばあさんが来たから、おばあさんにもすぐ車に乗って逃げろって。で、そこは、その指示して、今度隣さ行って、隣の家に行って逃げることを催促して。逃げろーってドア開けたらば、目の前に仏壇があって、前の年亡くなった奥さんの遺骨もまた写真もあるのさ。その遺骨よこせーって、写真もよこせーって、車に乗って、すぐ逃げろって。

渡邊さんも千葉さんらと同様、近所の家に見回りに行って避難を誘導している。理屈や考えがあつてのことではない。ときどき渡邊さんの口をついてでる「自然に動いている」という言葉が、もっともそのときの自己の状況を雄弁に説明してくれる語り方なのかもしれない。

当日の夜から、被災を免れた高台にある家、9軒にそれぞれ分かれて避難暮らしがはじまった。どのようにわかれたのだろうか。

秀雄: それも別に指示したわけではないんです。あなたはここ行きなさいとかね、うまいぐあいに配置になったんですよ。平等ぐらいに。それはやっぱり、その辺も、みんな絆っていうのがあるのかなあって感じてます(笑)。

「絆」は、2011年の流行語に入賞した言葉だ

が、マスコミを賑わした言葉とは別に、佐々木さんが込めた「絆」には、渡邊さんが、せめて「向こう三軒両隣だけは助けなきやならんだろう」と、今ならいえそうな思いに通じるものがあるようだ。新田部落で津波によって亡くなった人は2名、80歳代の高齢者と中年の男性であった。いずれも逃げろという声に耳をかさず、地震のあとの片付けをしていて逃げ遅れたためであった。ただ新田部落の犠牲者数は津波で8割近い家屋が破壊された被害の大きさにもかかわらず、きわめてすくない数に止まったとってよいだろう。その理由の一端は、部落会役員の行動に象徴されるような近隣への気配りと相互扶助的な精神にあったと推測される。

## 8. 役員改選からみる部落の戦略

2011年5月29日午前10時30分から新田部落会が開かれている。この場で、2010年度会計決算がなされ、部落会の役員改選がおこなわれ、会長に新たに渡邊鉦悦さんが選出され、事務局長に佐々木秀男さんが引き続いて再選されている。そして今後の部落会のあり方について協議がなされた。このときの事情を佐々木秀男さんが簡単にふれている。

秀雄: 津波来てしまつてね、あと、誰もやる人がなくて(笑)、そのままね、津波が来てしまったもんだから。残った人誰もいなかったからまあしょうがねえってことで。まあしょうがねえってこともないけども(笑)

\*1: (部落会長は) 渡邊さんが引き受けられたってことですか?

秀雄: ええ、これはもう無理無理頼んだんですね。

部落会の役員は従来の規約に沿ってではなく、現在は暫定的な措置で運営している。役員は、結

局、会長、事務局長、そして相談役の2名である。わたしたちのボランティアの受け入れをしていただいてる4名が部落会役員の全員だったのである。事業部や衛生部などの各担当部もなく、班長もおいていない。しかも、役員任期は、従来の2年ではなく「任期も決めないで、ええ。あとそのままずっと（笑）なっていますけどね」と、笑いながら応えてくれた。

ここで注目したいのは、「無理無理頼んだ」と佐々木さんがいうように、会長に渡邊さんが推されたことである。彼は、9軒の避難所のひとつの班長を担ったけれども、その前はとくに主だった部落会の役割を担っているわけではなかった。しかも、彼は新田部落へは仕事にともなって転入してきたニューカマーである。来住者は伝統的に日本の地域社会では地付きの人たちより相対的に冷遇されてきた、というのが一般的な理解であろう。にもかかわらず、そうしたニューカマーが推挙されたのである。わたしは、この新会長選出にも新田部落のしたたかな戦略が認められるのではないかと考えている。そのことは新田部落が自主、自立的なコミュニティとして機能している証でもある。

そう考える理由は、こうした危機的状況に対処してきた渡邊さんの個人的な能力が評価されて会長に推挙されたのではないかと、思われるからである。その能力は震災直後から渡邊さんが避難所暮らしをしながら、地区の業務にどのように対応してきたのかをみることで明らかになる。実際、すでにみたように、彼は避難の際にも他の住民にはまねできないほどの用意周到さを発揮した。その能力は震災後に届いた支援物資の受け取りや避難所への仕分けと配給においても発揮された。

救援物資の受け付けは専門の担当者がいた。そこに応援で入った渡邊さんは、受け取りと仕分けの記録の仕方をみて、これではあとからみてもわからないと思い、「自らおれがやる」と名乗り出た。会社勤めの経験から、書類作りには慣れていたのである。

渡邊：わたしは、市から来るもの、自衛隊でよこすもの、民間から来るものとして、ノートを分けて。これで大きな仕分けできるでしょ。……そしてそれも、日にちと、数量、品目、品目も事細かに。いつ受けて、何が何ほ種類で、書いておいてな。そして、それを今度分配するわけだ。……これを人数で割るわけだ、今度は。そしてそれを各班に分配する。……各班ごとにちゃんと場所決めておいて、名札つけて、わたしが人数に合わせてものをそこに置くわけだ。そしてそれをとりに来なさいって。

(中略)

渡邊：専任になってしまった。なぜかという、受けた記録はその場で投げる「捨てる」んじゃないくて、これはずーっと集落の震災後の記録にとっておきやないけな。だから、すべて地震が起きて、ペーパーにしたものは、記録としてとっておくんだということがある人となない人の差なんだ。……集落の記録は、全部あらゆるもの、それだけに限らず。いろんなとった記録は、すべて事務局のうちに保存させて。ま、そういうことで食料担当してね。受け付ける、配給する、次の日の要望品をこう出す。そうすると、朝から晩までやってなきゃできない。それが連休までやってたから。わが家のことがそのまんまで。

渡邊さんは自分の家の片付けもできないまま、自分で買って出て支援物資の仕分けと配給に奔走したのであった。記帳は、たんにわかりやすさだけでなく、今後の記録の保存も視野に入れたものだった。

さらに班長として避難所について一つの決断を促してもいる。それは個人宅に分宿した避難所の閉鎖の時期についてである。渡邊さんはいつまでも避難生活を続けるのはだめだと考えている。ひ

とつの理由は、人間関係がこじれないようにと考えてのことであった。「今までのお付き合いのない人たちが、毎日接触するわけだ。せまいところだから、こんな「近い距離」感覚で接触している。やっぱり、そのへんの人間関係な。それが高じてくるとストレスがたまる。(そう)ずっと人間関係もこじれては困る」と考えたのである。こうした人間関係について機微は、渡邊さん自身が震災前から、この地域コミュニティのなかでニューカマーとして気遣ってきたことから発している配慮かもしれない。もう一つの理由は、「いつまでも支給品に頼って、何してもかにしても口に入るものは来るといふ安易な、これがいつまでも続いたら人間が自立する心を失うんじゃないか」という危機感からであった。こうして5月の連休前後で「無理無理」避難所を解散したのであった。もちろん、そのためには避難者の同意が必要だから、徐々に解散の情報を出して、他の避難所でもそうした動きがあって、5月の連休明けから徐々に避難所が解散する運びとなった。それから約1ヶ月後の6月11日に、新田地区災害対策本部班長会議が終了している。ちなみに陸前高田市内のすべての避難所が閉鎖されたのは、8月14日であったから、新田部落の閉鎖はその2ヶ月前のことであった。

## 9. 危機における伝統的コミュニティの再生

ここで、あらためて東日本大震災の被災直後に新田部落が住民に対しておこなった対応をふりかえってまとめておきたい。

地震直後、地区住民は津波が来ることを予想しながらも、まさか住宅地までは来ないだろうと思い込んでいた人が多かった。とりわけ古くから居住している人は、過去の津波経験から推し量って高をくくっていた節がある。すなわち、今回の大津波については「想定外」といわれることが多かったように、経験知がむしろ避難行動に災いしたところがある。それに比して、渡邊さんの行動

にみられるように、そうした経験をもたない新住民は先入観にとらわれないということで、むしろ危機意識を強く持って行動することができたところがある。ただ、避難においては、「津波でんでんこ」といわれる慣習的用語法があるものの、決してばらばらではなく、住民が近隣を気遣い、助け合って避難したことが役員の避難行動の語りからも明らかになった。これが伝統的な共同性に由来するかどうかはともかくとして、部落が連帯性を強く保持している証であるとはいえるであろう。それが犠牲者をすくなくして人命を守ることにつながったのである。

被災直後の住民生活にとって、食料などの生活必需品の確保や水、電気などの供給は必須の課題である。支援物資が届くまでの直後の1週間は、陸の孤島と化していたこともあり、食料品を確保するのに困難をきわめた。それぞれ波をかぶったものをかき集めて、一人、1日1個のおにぎりでのいざりしたのである。数々の困難のなかで、水の供給は驚くほど迅速におこなわれた。それは、上水道のほかに、かつて使っていた簡易水道の水源の保全や井戸水の利用で、再度、それらが活用できたことによる。上水道システムは、一端破壊されると被害も甚大で復旧には時間もかかる。しかし、部落の生活世界のなかで確保できる簡易水道や井戸は、危機的状況のなかでも住民の協同で簡単に復活が可能であった。それになによりも水が「うまい」。上水道システムにすべてをゆだねるのではなく、新田部落の経験からも地域社会のびとの生活世界に根付いた伝統的な水利用という生活の知恵を、あらためて見直す必要がありそうである。

さて、新田部落が大震災後に示したさまざまな対応のうち、わたしたちの経験からしてもボランティアの受け入れ体制や記録資料の作成だけをとっても、その準備の良さには目を見張るものがある。そうした一つひとつの対応の根幹に、この地域コミュニティの特質がみられた。その特質がもっともよく現れているのが、部落会の役員改選

で渡邊鉦悦さんが強く推されて会長になったことである。だれもが自らの被災を抱えて、役員を引き受けることに困難を感じていたはずである。渡邊さんも例外ではなく、しかも彼は定年退職後に、それまで趣味にしていた油絵を描くことに専念し、自宅でアトリエまで作って創作にいそしんでいた。本人に確認したわけではないが、部落会に関与する希望もそのつもりもなかったのではないかとと思われる。未曾有の危機にあたって、文字どおり「無理無理」お願いされた結果だったのではないだろうか。

さらに渡邊さんが部落会会長に推挙されるには、別の難点もあった。彼はこの地域コミュニティのニューカマーである。ニューカマーは、伝統的に日本の地域社会ではマージナルな位置づけをされ、むらはずれに住んでいたり、当初は部落構成員としては認められず、何代かたってやっと正当な住民と認知されるのが常であった。したがって、一般的にニューカマーが部落の代表的な役割を担うことは、まれだったといえよう。新田部落での古い家の姓は、黄川田、及川、そして千葉姓である。先代の会長も及川姓であった。また、事務局長として震災前から尽力している佐々木秀雄さん自身もニューカマーであるが、妻が地付の千葉政彦さんの妹ということで姻戚関係にあたるから純粋にニューカマーとはいえない。だが、ニューカマーは役員にはなりにくいのではないかという疑問は、佐々木さんの言葉であっさり否定された。

\* 1：(外から来たお二人が) すごく熱心にやられてるっていうところが印象深いんですけども。

秀雄：ええ(笑)。あのね、わたしもこの頃こう考えるようになって、歴代の会長さんっていうのはね、どういうわけかよそから来た人がなってるんですよ。

\* 1：あ、そうなんですか。

秀雄：いや、偶然だと思うんですけどもね。ま、地元の人もおりますけどね。結構そういう

人たちが多いんですよ。

(中略)

\* 1：わりとこう、そういう意味では地元、元々の地付の人たちっていうのは、そういう新しく入ってきた人たちをわりと受け入れて。

秀雄：そうですね。

このコミュニティには、もともと「よそもの」を受け入れる基盤があったようだ。たしかに歴史を遡れば、1933年に大船渡線が開通してから新田部落は急速に発展したのであった。もとはと言えば、10軒ぐらいの家しかなかったのであるからむら自体がニューカマーの家の集まりで成立しているようなものである。当然、地付の人だけではなく来住の人たちの力を借りなければむらの発展もなかったはずである。その意味では、「よそもの」の受け入れは、むしろ積極的にとられた伝統的なむらの戦略であったといえる。

ニューカマーが積極的に役員に登用された理由に、新田部落がもともと半農半漁のむらであったことも関係している。第一次産業の従事者は、会議にしても、あるいは書類を書くことや記録作りについても、どちらかといえば苦手な人が多い。いきおい、文書資料を作成することに慣れている官庁や会社勤めの経験者に頼りがちになる。千葉政彦さんも千葉一栄さんともに市役所職員の経歴をもつように、たとえ地付の人でも部落の役員を担っているのは、事務的な仕事にも慣れた公務員や会社員経験者が多いようだ。二人の千葉さんは、定年退職後に部落役員を担い、佐々木さんも市役所の定年退職後に部落会の事務局長を引き受けて代々務めてきた。渡邊さんが支援物資の受付・配給担当の専門になったのも、そうした経験が背景にあった。

たしかに、むらの対外的封鎖性という伝統的な特質は、従来の第一次産業だけではなく高度経済成長期以降の職業の多様化によって、むらを構成する単位である家の変化とともに変わってきたと

というのが、日本のむらの一般的な動きなのであろう。新田部落は、こうした変化を先取りしながらも、転入するニューカマーの能力を積極的に活かす戦略をもともと培ってきたようだ。2年半が過ぎた2013年9月、震災前の64世帯は31世帯まで半減していたが、高台移転で7世帯がもどる予定で、佐々木さんによるとむらの構成は近いうちに40世帯ぐらいにはなるだろうという。一挙に構成員が減るといふ地域コミュニティはじまって以来の未曾有の危機状況のなかで、新しい部落会役員選出はむらの生存のための戦略ともいえた。

## 10. 今後のボランティアに期待するもの

むらには、伝統的にゆいといわれる共同作業がある。一戸単独では不可能な道普請や茅葺き屋根の屋根葺きや川掃除、また新田部落でみたような用水の維持・管理などの仕事である。もちろん、最近では、道普請などはほとんど行政に任されている。新田部落でも、これまでも草刈り、側溝の溝掃除、小友駅の清掃などの共同作業が部落会の行事としておこなわれてきた。陸前高田市での主な震災ボランティア作業が次第に終わってきているなかで、新田部落にはどのような作業が今後も残されているのだろうかと思ねると、佐々木さんは「なんか見つけておきますので」という返事だった。今後も訪ねるわたしたちからすれば、震災前にもおこなわれてきた部落会の共同作業を肩代わりすることもできるだろうと思う。「若い方もほとんどいなくなって、草刈りでもなんでも、人数集めてやるっていつでも何人も出てこない」状況が、震災前から起きているのを耳にしていたからである。その一方で「ボランティアを労力と考えるはだめだっていわれているんですけどね」と、佐々木さんがいう。部落会役員のボランティアに期待する真意は、べつの所にあった。渡邊さんが、ボランティアセンターのスタッフの言葉を借りて次のように語っている。

渡邊：「来てくれるだけでいいんだ」というふうに言ったんです。これ、しかるべし言葉だ。遠方から来て、仕事して、帰ってそれだけじゃない。「あなたたちが来てくれるだけで被災地の人たちはほっとするよ」。それ、非常にいいことだ。偉いスタッフいるなあと思った。そういう気持ち持たないとな。(……)だからわたしも佐々木さんも、次は、この研修内容(を)充実してやっていこうというふうになるんじゃないかな。

毎年やってくる学生に研修会として写真や資料をみせ、この経験を風化させないように震災の状況をしっかり伝えること、そして遠くからやってくるボランティアとの交流をはかること。そこにこそ部落会役員の思いがあった。「それでこういうアルバムはね、いっぱい作って絶対流されんよう保管しておくんです。それはわれわれの義務かなって思ってた。この部落でのね。後世のために」と、佐々木さんは震災の写真アルバムを学生にみせながら語ったのだった。

## 注

- 1) 小友町新田部落役員へのインタビューは、以下の日程でおこなわれた。
  - ①千葉政彦(顧問)  
インタビュー日：2012年11月5日、インタビュー場所：千葉政彦宅、インタビュアー：桜井厚(\*1)
  - ②千葉一栄(相談役)  
インタビュー日：2012年11月5日、インタビュー場所：千葉政彦宅、インタビュアー：奥村隆(\*1) 井上梨沙(\*2)
  - ③渡邊鉦悦(部落会会長)  
インタビュー日：2012年11月5日、インタビュー場所：新田部落会集会場(かじや倉庫)、インタビュアー：舩谷鋭(\*1) 山田千尋(\*2)

## ④佐々木秀雄（事務局長）

1回目：インタビュー日：2012年11月5日、インタビュー場所：新田部落会集会場（かじや倉庫）、インタビュアー：柳澤剛志（\*1）今西健太（\*2）

2回目：インタビュー日：2013年9月16日、インタビュー場所：佐々木秀雄宅、インタビュアー：桜井厚（\*1）山田千尋（\*2）井上梨沙（\*3）

それぞれのトランスクリプトの表記のなかで、主な表記記号を以下の通りである。

- ・（ ）は文意をわかりやすくするために補ったもの、（（ ））はインタビューの状況を説明したもの、[ ]は直前の言葉を説明したもの。
- ・引用されたトランスクリプトのなかで、省略した部分については、（中略）もしくは……を挿入した。
- ・トランスクリプトのなかで、（・・・）で表されているのは沈黙であり、（・）は約1秒を目安とする。

なお、同じトランスクリプトを用いて、小友町新田部落の震災時についてまとめた2013年度卒業論文が2013年12月に提出されている。このフィールドワークに参加した桜井ゼミの4年生二人の執筆による。井上梨沙『東日本大震災と故郷への『想い』——被災地・新田部落住民5人の語りから』、山田千尋『東日本大震災で見えた地域コミュニティにおける相互扶助の精神——岩手県陸前高田市小友町新田部落の例から』である。この二人はわたしの指導学生でもあるので、機会あるごとに論文執筆の相談を受け、またアドバイスをおこなってきた。したがって、データが同一であることからだけでなく、論文の論点や注目点に二本の卒業論文相互に、また本稿とも類似の個所がみられる。あらかじめお断りしておきたい。

- 2) たとえば、「広義の経済学」や「地域主義」の代表的論者としては、玉野井芳郎（1979）があげられ

る。

## 参考文献

- 桜井厚 1984「川と水道——水と社会の変動」鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史』御茶の水書房
- 桜井厚 1989「生活世界と産業主義システム」鳥越皓之編『環境問題の社会理論——生活環境主義の立場から』御茶の水書房
- 玉野井芳郎 1979『地域主義の思想』農山漁村文化協会
- 鳥越皓之 2012『水と日本人』岩波書店
- 吉原直樹 2013「地域コミュニティの虚と実——避難行動および避難所からみえてきたもの」田中重好・船橋晴俊・正村俊之編『東日本大震災と社会学』ミネルヴァ書房